

二月の感話

業報

行為の結果として種々な事態に現れてくるのである。

それは蒔いた種子の実を結びのにも似ているので、行為は種子に譬えられ、その結果は果実に譬えられる。原語でプハラ (phala) は、みのるといふ動詞からきた言葉で、みのり、またみのつたものという意味である。「善悪の報いは影響の如し」とあるように、行為の結果は微妙に現れてくる。人の生命を傷つけた報い、盗みの報い、淫逸の報い、虚言の報い、誤った思想をいだいた報い、怠惰の報い、飲酒の報い、それらは自分 個の肉体上、精神上に現れるばかりでなく、家庭的、社会的環境に現れてくる。悪業におぼれている人の精神は次第に落ち着きがなくなり、容姿は衰え、肉体は損なわれ、家庭の不和から社会的な不信用にまでなつてきて、その結果ますます煩惱をお



こし、悪業重ね、一層の苦報をまねくことになる。それを印度の古い教理家は、人間の生活は「惑・業・事(または苦)の三輪」の無限の展開であることとを説いた。何気なく犯した一度の過失が、意外に苦しい結果をまねいた経験は、誰しももっているであろう。反対に、「陰徳あれば陽徳あり」といわれ、禅門では殊陰徳(見えざる徳)を積むことを重んずるが、何気なく行っていた善根が、大きな報いを現して、精神上、肉体上、または環境上に幸福をもたらすこともある。その善行報いは、人の魂を次第に明るくして、やがて光明の世界に導き入れる本質をもっている。「悪人は悪を行じて苦より苦に入り、冥きより冥きに入る。善人は善

を行じて明るきより明るきに入る」(大無量寿経)と言われている。善行は解脱の方便門になる。それゆえ、いかなる宗教も、魂の救いのために、善業を勧めぬものはない。しかし、窮極においては、人は善業によって救われるのではなく、信仰によって救われる。(稲津紀三著「印度哲学史」抜粋)

私みたいなものが……、私なんかはとてもブツダになれない……というのには、疑っているのである。必ず目覚めさせる教えがあるのだから、釈尊の求め歩いていた教えに身を投じれば良いのである。三寶寺では、出世間の人々が育っているのである。ある女性は、釈尊の語っている言葉をそのまま知るために、釈尊の発音されている音声を学ぶために、辞典を購入された。学ぶは、まねぶ、まねをする。ことから始まっている。学ぶには獲物をつかまえる姿勢がないと、進行しないのである。限りあるいのちであるから。

合掌

えしんにさまは

こどもが

おすき

親鸞さまと恵信

尼さまとの間に、三男三女六人のお子さまがお生まれになりました。



お父さんは毎日伝道教化にお忙しかつたから、お母さんの恵信尼さまが、お子さま方の養育を分担され、やがて

越後から関東へと親子睦ましい生活が続けられたことでしょう。

のやまを

こえて

いなだのさとへ

関東に移られた親

鸞さまは、常陸の国(茨城県)稲田というところに住まわれました。お念仏の教えなど今まで聞いたことのないお百姓や、武士までが、聖人のお話を耳を傾け、その評判は、たちまち一帯に広まっていききました。



たうえを

しながら

おねんぶつ

親鸞さまは越後(新潟県)でも関東でも、いつもその土地の人々といっしょに生活されました。忙しいときはお百姓さんの田植えを手伝ったり、稲刈りをしたり、お念仏の中にみんなと喜びを分かちあわれました。



心に如来を思うとき